

特集 2 : Clinical and Experimental Nephrology (CEN) の歩み

CEN の歩み—あとがき

木村玄次郎

日本腎臓学会の英文機関誌「Clinical and Experimental Nephrology (CEN)」が権威あるデータベースである Science Citation Index Expanded (SCIE) および Current Contents/Clinical Medicine に 2008 年より収載されるとの通知を Thomson Reuters 社から正式に受けたのは、2008 年 9 月のことであった。このことは、2008~2009 年の 2 年間に CEN に掲載された論文が、2010 年の 1 年間に SCIE 収載誌によってどれだけ引用されるかに基づいて Impact Factor (IF) が算出され、2011 年に CEN として初めての IF が公表されることが確定したことを意味する。これによって、「CEN に IF を」との日本腎臓学会の一つの悲願が達成された。これまで、今井 正、清水不二雄、両編集委員長 (CEN の初代および二代目編集長) が鋭意努力されてきた日本腎臓学会としての一つの念願が適えられたことを、学会全体として喜びを共にしたいと思います。

そこで、この記念すべき節目を学会として祝い、かつ更なる CEN の発展を目指すことを確認する意味で、第 52 回日本腎臓学会総会 Japan Kidney Week 2009 (藤田敏郎 会長) の場をお借りして「Clinical and Experimental Nephrology (CEN)—Impact Factor 獲得後の活動に向けて」を企画させていただいた。幸い会長からも賛同を得て盛大な祝賀会となり、かつ、これまでの CEN の歩みを総括できる素晴らしい機会になった。今回の特集「CEN の歩み」は、そのときの貴重なご発表を記録に残す目的で組ませていただいた。

さて、日本腎臓学会では、2007 年から邦文機関誌である「日本腎臓学会誌 (JJN)」が特集号化され生まれ変わった。同時に CEN は年間 6 号発行へと増刊し、2008 年からは、Online First (Immediately Online) として accept され次第 WEB 上に掲載され、かつ引用可能となっている。また CEN の目次を JJN に掲載し、CEN は実質的に paperless へ

移行した。これらの改革によって、CEN への投稿数は順調に増加し、しかも海外からの投稿数が国内を上回る勢いになっている。アメリカ腎臓学会に CEN のブースを設け、見本誌や call for papers を配布したことも効果を発揮しているものと推測する。

繰り返しになるが、今回の SCIE データベース収載は、2008 年 4 月に Thomson Reuters 社を表敬訪問し再々申請のタイミングを考慮している最中に、先方から決定通知をいただいた。当方から申請したわけではない。Thomson Reuters 日本支社を表敬訪問した際に驚いたことが幾つかある。まず、エントランスには無数のモニターが設置され、各国の通貨や株価の推移が時々刻々映し出されていたことである。Thomson Reuters 社は、筆者の頭の中でイメージしていた科学情報に特化した会社ではなく、あらゆる分野の情報を分析し付加価値のある情報をユーザーに提供する会社であることが一瞬にして理解できた。最初に、担当者が彼らのデータベースに基づいてさまざまな角度から CEN を分析して見せた。SCIE に収載されるためには CEN の情報発信能力を高める以外に道はないとの論法であった。そこで、①日本腎臓学会が学問的情報発信量では明らかに米国に次いで第 2 位にあること、②日本腎臓学会では今後、評議員資格に CEN に論文を発表することを必須化する方向で取り組むこと、③CEN に掲載された論文の表彰制度をさらに充実させること、④会員が学会機関誌に誇りを持つよう JJN を特集化していること、⑤学術総会での教育講演や優秀症例は優先的に CEN に掲載する制度を推進すること、などを伝えた。また、若い世代では、アジア諸国との交流を深め、米国一辺倒ではなく、ヨーロッパに向かって情報発信の必要性を感じていることなども意見交換した。厳しい雰囲気であったが、帰り際に CEN については現在も雑誌見本が続けて送付されているが、JJN の特集号も拝見したいとの要望があった。早速、事務局から Thomson Reuters 社へ 3 編ほど既発行の JJN を送っていた

だいた。

今回の特集「Clinical and Experimental Nephrology (CEN) の歩み」によって、これまでいかに多くの方々がさまざまな努力を重ねてこられたかが、少しでもご理解いただければと思う。編集委員会を献身的に支えてこられた歴代の編集担当の幹事の先生方や事務局の皆様方にも改めて御礼を申し述べたい。漸くにしてわれわれの努力が実を結び、CEN

の実力が正当に評価されたことは喜びに堪えない。すでに2008年からCEN掲載論文はIF計算対象になっており、いよいよ2011年にはCENにIFが与えられる。会員の先生方には、これまで以上に誇りを持ってCENを育てていただきたくお願い申し上げます。と同時に、日本腎臓学会の発展とともに、CENのIFもそれに相応しい質の高さを維持し、さらに高まってくれることを念願する次第である。